横浜市立中和田小学校　共に育つ「なかわだっこ」　令和8年10月30日

学校だより　11月号

http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/nakawada/

それぞれのドラマが輝いた運動会、そして深まる秋の学びへ

校長　　山中　卓

校庭の木々も色づき始め、爽やかな秋風とともに実りの季節を感じるようになりました。保護者の皆様におかれましては、日頃より本校の教育活動にご理解とご協力をいただき、心より感謝申し上げます。

先日の運動会では、天候の心配や日程調整等も含め、温かいご支援とご声援をいただき本当にありがとうございました。本番に至る取組の過程には、子どもたち一人ひとりにとって忘れられない数々のドラマがありました。

運動会直前には、感染症の流行や怪我、また当日の体調不良などにより、悔しくも参加できなかった子どもたちもいました。これまで仲間と一緒に練習を重ねてきたからこそ、その無念さは計り知れません。しかし、その想いはしっかりと周りの仲間に届いており、「参加できなかった友達の分も頑張ろう」と、より一層心を一つにする姿が見られました。

とりわけ、悔しい思いを抱えながらも決して諦めず、「今、自分にできる役割」を見つけ出し、演技や競技、係の仕事を全力で支えてくれた子どもたちもいました。表舞台で躍動する姿はもちろん素晴らしいものですが、裏側に回って仲間を思いやり、最後まで支え抜いた姿にこそ、確かな精神的成長と深い優しさを感じ、胸が熱くなりました。この貴重な経験は、子どもたちの大きな自信という実りにつながったと確信しております。

さて、運動会を終えた11月は、落ち着いた環境の中でじっくりと学びを深める「読書の秋」でもあります。

私事になりますが、以前保育園の園長を務めておりました際、子どもたちの成長と「言葉」の関わりについて深く考える機会が多くありました。

乳幼児期の子どもたちは、大人の声を通して豊かな「言葉のシャワー」を浴び、イメージや感情を育んでいきます。そして小学校へ上がり、絵本から文字中心の「幼年文学」へと向かう時期を迎えます。この幼年文学は、例えるなら本格的な読書へ踏み出すための「離乳食」のような大切な役割を果たしていると感じます。

こうした私の中での読書観を作ってくれたのが、瀧薫さんの『保育と絵本』（エイデル研究所）という保育書でした。絵本や言葉が子どもの心にどう届くのかが温かい視点で描かれており、子どもと本をつなぐ大きな道しるべとなりました。

そして、今強く感じることは、「文字が読めるようになったからといって、急に一人立ちさせなくてもよい」ということです。文字を追うことだけで精一杯になってしまう時期だからこそ、時には身近な大人が耳から言葉を届けてあげることで、子どもは頭の中で自由に情景や心情を膨らませることができます。大人の温かい声で読んでもらう時間は、心を落ち着かせ、安心して物語の世界に浸る特別なひとときとなります。

また、高学年になると「自分で読めるから」と読書を子ども任せにしがちですが、高学年だからこそできるご家庭での「本を介した対話」があります。 読書を通して育まれるのは、単なる語彙力や知識だけではありません。文章に直接書かれていない場面や登場人物の思いを推し量る「行間を読む力」や「相手の気持ちを想像する力」こそが、これからの時代を生きる子どもたちのコミュニケーション力の根っこになります。 ご家庭でも、「この場面、あなたならどうする？」「主人公は、どんな気持ちだったと思う？」といった問いかけをしてみてください。また、「大人がいま読んでいる本」の面白さを話してあげたり、時には同じ本を開いて「読書の楽しみ」を共有したりすることも素敵な刺激になります。

来週から、読書週間が始まります。学校のホームページで、学校図書館での活動や日々の授業風景など、子どもたちが静かに思考を深める姿を随時発信してまいります。ぜひご家庭でも、秋の夜長に一緒に本を開きながら、心を通わせる対話のひとときをもっていただければ幸いです。

朝晩の寒さが一段と厳しくなってまいります。手洗い・うがいの励行など体調管理に留意し、誰もが安心して自分自身を実らせることができる学校づくりに、教職員一同力を合わせて取り組んでまいります。今後ともご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。